

# 要旨

## 【目的】

国内看護系大学における解剖生理学・形態機能学教育で使用されているシラバス・教科書の一次調査を行い、教授の枠組みを明らかにする。

## 【方法】

### I. 研究デザイン 量的質的記述的研究

II. 対象は日本看護系大学協議会会員校の4年制看護系大学で、解剖生理学・形態機能学科目のシラバス・教科書、大学公式ホームページから、大学基本情報(4項目)、単位認定者属性(5項目)、シラバス内容(12項目)、教科書内容(10項目)の計31項目を収集した。

### III. 分析方法

1. 名義尺度は、各変数間の関連を $\chi^2$ 検定(有意水準5%両側検定)にて分析を行った。
2. 学習目標・到達目標の内容データは、Berelson, B.(1957)の手法で内容分析を行い「教員の意図・ねらい」とした。
3. 計31項目の量・質的データの統合分析方法は、(1)各大学の教員の意図・ねらい、単位認定者職種、授業単元名称、解剖学と生理学の教授が統合か分離かの4点を基準として分類し、(2)教員の意図・ねらいと、大学設立年数、看護師国家試験出題基準の網羅率のデータは混合研究法の収斂デザインのジョイント・ディスプレイを用いて統合した。以上の分析内容を教授の枠組みの現状とした。

## 【結果】

単位認定者の職種は医師が最も多く24.4%、看護職は6.8%であった。授業単元名称は【系統局所別単元名称】が多数を占め85.4%、【系統・生活視点の単元名称】は4.8%であった。発展科目開講は22.5%で、開講割合は看護職で【系統・生活視点の単元名称】の方が看護職以外の【系統局所別単元名称】よりも多かった。教授方法の工夫は【系統・生活視点の単元名称】を使用する者が【系統局所別単元名称】よりも行っていた。使用教科書は「系統解剖学・系統生理学混合」が最も多く、看護職以外による執筆が多かった。教授の枠組みは、【正常・異常の両面から人体の仕組みと働きを学ぶ】【日常生活行動を営む人体の仕組みと働きを学ぶ】【分子—器官系の視点から人体の仕組みと働きを学ぶ】【器官連携システムの視点から人体の仕組みと働きを学ぶ】【共通用語として人体の名称を学ぶ】【発生—老化の視点から人体の仕組みと働きを学ぶ】【国家試験の視点から人体の仕組みと働きを学ぶ】の7つが明らかとなった。最終的に授業単元名称などを含め分析した結果、【共通用語として人体の名称を学ぶ：系統局所別分離看護職】などの計13枠組みが明らかとなった。

## 【考察および結論】

発展科目の開講・教授方法の工夫は看護職が多く実施していたことから、看護職の方が看護への結び付けを意識して教授していると推測された。【系統局所別単元名称】においても解剖生理学・形態機能学の知識を看護につなげられる機会(発展科目開講や教授方法の工夫等)を持つことで、看護に必要な看護基礎教育における解剖生理学・形態機能学の知識を修得できる可能性があると考えられる。今後は13の教授の枠組みの有効性について検討し、有効な教授の枠組みを開発することが課題である。